

寄稿

子どもたちへのお芝居 ～札幌発の子どもたちと人形劇の世界へ

劇作家・演出家・俳優／公益財団法人 北海道演劇財団 理事長 齋藤 歩

6年前、2016年に札幌に呼び戻されて、北海道演劇財団という、いかつい名前の財団法人の芸術監督としてのお仕事が始まりました。その当時、演劇財団で創る舞台演劇の多くが「未就学児童はお断り」と書いてあることが多く、お子様連れの親御さんたちを全く相手にしていない演目だらけでした。こいつを何とかしようとして始めたのが、シアターZOOの親子劇シリーズ「劇のたまご」です。「ぐりぐりグリム」と名付けたグリム童話の舞台化シリーズや、皆さんが知っている世界の名作童話の数々を、ちょっとヘンテコな物語にして舞台化し続けています。演劇財団が運営するシアター ZOOや稽古場スタジオは中島公園のすぐ隣にあるので「こぐま座」とはお隣さんですから、そこにたまたま出入りしていた沢則行さんにお手伝いをお願いしたことが、こぐま座、やまびこ座とのお付き合いの始まりだったような気がします。

演劇を生業にしてから、もう35年ほどが経ちました。そのほとんどの時間を大人を相手にする劇場演劇ばかりに費やしてきた私にとって、未成年や、子どもと呼ばれる人たちに向けた演劇に取り組んだのは初めての経験でした。そんな私にとって、こぐま座ややまびこ座で活動をする人たちが長年積み重ねてきた経験やノウハウが頼りになるに違いないと感じて、まずは沢さんに相談したのです。

学生時代からお世話になっている人形劇師・沢則行さんと、初めて一緒に作品を創らせていただいたのは、2016年春、アリストパネスの「鳥」でした。劇中登場する人形の製作や人形遣いの指導を沢さんをお願いしました。そんな縁からなのか、どうだったのか、記憶が定かではありませんが、2017年の夏「中島公園百物語」という、中島公園の歴史妖怪絵巻を沢さんや矢吹さん、そして子どもたちと巨大人形劇で創作し、野外公演するというお仕事で、徹底的にこぐま座・やまびこ座の皆さんとお付き合いすることになったのです。私は脚本を書き、演出、音楽も作らせていただき、子どもたちの指導もさせていただきました。この時、こぐま座・やまびこ座に出入りしている子どもたち、そして、その活動を支え続けるヘンテコな学生たちや、大人たちの存在を知ったのです。

こぐま座・やまびこ座に出入りする子どもたちは年々成長し、やがて大人になって行きます。その子どもたちに付き合い続け、寄り添い続け、その成長を割とダイナミックに、時に乱暴に見守り続けている大人たちの存在を知ったのです。そんな人たちがこぐま座・やまびこ座を形作っているのだと。

2022年、こぐま座・やまびこ座とのお付き合いを一步前進させてくれるお仕事に恵まれました。2月にやまびこ座で公演した「北のおばけ箱」という作品で、私は初めて人形劇の脚本を書いたのです。そしてその本の演出と製作を矢吹館長にお願いしたのです。人形劇を演出したことはありませんでした。台本も

書いたことはありません。人形という道具に命を吹き込む術を私は知りません。こぐま座・やまびこ座の人たちは熟知しています。そこで私は台本を書くということで、初めて人形劇に参加させていただいたのです。2017年の野外人形劇「中島公園百物語」の経験はありましたが、あれはどちらかと言えば、人形を被った人たちが演じる野外演劇だったと思っていますので、全編にわたって人が人形を遣って表現する「人形劇」は「北のおばけ箱」が初めてだと思っているのです。

脚本を書き始めてすぐ、気づいたことがありました。演劇では無理なことの数々が、人形劇ではいとも簡単にできてしまうということです。例えば「パンペが空を飛ぶ」と書けば、人形劇ならば簡単に空を飛ばせますが、演劇ではそうは行きません。大変な装置や安全策、もの凄い予算と人出が必要になってしまいます。「おなら」や「うんこ」を舞台上に平気で登場させられるのも人形劇ならではの演出です。演劇でそれをやったら、ちょっとした事件になってしまいます。私が軽い気持ちで書いた「目玉が飛び出す」とか「舌が伸びる」とか、かなり無理な注文も、やまびこ座の皆さんは、いとも簡単に、当たり前のようにやってのけてくれました。「おなら」や「うんこ」もとても可愛らしく登場させてくれました。しかも、それを実に楽しそうに、子どもたち、学生たちが演じてくれました。アイヌの歌や踊りの指導をしてくれた私の友人・マユンキキさんも、とても喜んでくれました。本当にうれしそうに。

演劇よりもはるかに自由で、飛躍できる可能性のある人形劇の面白さを、こぐま座・やまびこ座の皆さんが実現してくれました。人形劇の常識を知らない私のような劇作家が書いた人形劇の台本に、皆さんは苦勞なさったと思います。それでも、人形劇の常識をちょっと外れた人形劇が生まれたのではないかと感じています。

「北のおばけ箱」の公演を観終わって、すぐに「続編」の可能性を感じた私は、演出をしてくれた矢吹さんに言いました。「北のおばけ箱2、やろうか?」

劇作家・演出家・俳優
公益財団法人 北海道演劇財団 理事長

齋藤 歩 (さいとう あゆむ)

1964年、釧路市生まれ。北大演劇研究会を経て、1987年より札幌で演劇活動。2000年より東京での俳優・演出家の仕事を開始する一方、札幌でも活動を続け、現在、北海道演劇財団の理事長・芸術監督。札幌を拠点にした演劇創造、東京を拠点にした映画、テレビ、舞台出演など活動は多岐にわたる。



～私の創造の場は新しい「やまびこ座」へ移る～ 鈴木 喜三夫

「中島児童会館」を出た「劇団さっぽろ」は、市内をあちこち移転しながら1976年、宮の沢に自前の稽古場を新設。やっと落ちついて演劇活動が出来るようになった。

「中島児童会館」で培った創造の力で63年から北海道内の「巡演劇場」を展開、いろいろな困難を克服して何とか定着させたのである。そのため「中島児童会館」とのお付き合いも殆ど無くなった。

86年、私は27年在籍した「劇団さっぽろ」を退団、フリーの演出家として他ジャンルでの演出活動にも挑戦しました。その2年後88年、札幌こどもの劇場「やまびこ座」がオープン。私の創造の場はさっそくその新しい劇空間に移されることになった。

89年、マルシャークの有名な児童劇『森は生きている』を「やまびこ座」とプロデュース公演をして以来、ミハルコフの『うぬぼれ兎』、人形劇『オズのまほうつかい』、宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』、『十二の月たち』などを創ることになる。

「中島児童会館」によって生まれた私の創造の芽が、「やまびこ座」で花を咲かせたのである。(終)

この原稿を書き始めた時、大変、衝撃的な知らせが入った。この文の題名とは異なるが同じ「創造」に関わることなので急遽、本文を縮小して書くこととした。

ショックだったのは、「やまびこ座」館長の矢吹英孝氏の転勤である。これからも「やまびこ座」を更に充実した札幌市、否、北海道の「子どものための文化・芸術活動」の拠点の推進者として期待されていただけに「なぜ?」と問わざるをえない。

「劇場」はただの建造物ではない。「劇場」は「創造する場所」である。だから「劇場」の館長は、少なくとも「創造者」や「文化・芸術」に憧憬が深い人でなければならないと思う。

「創造」という仕事は、私がこの連載でも書いてきたように懸命な研鑽と長い時間をかけて育てていくものである。

最後にこの2月に発行された『北海道の児童文学・文化史』(日本文学学会北海道支部編)のなかに、児童文化研究家・谷暎子が書いた一文があるので、それを載せたい。

「(前略)中島児童会館は官と民の協同で、札幌の児童文化センターとしての役割を果たしてきたといえよう。こうした基本的な姿勢は、中島児童会館に隣接する「人形劇場こぐま座」(略)と「こどもの劇場やまびこ座」(略)にも受け継がれてきた。(略)鑑賞はもちろんのこと、作品を創りだす創造的劇場を志向してきたこと。実現をめざして専門家や地域との連携、人材育成など新たな挑戦を続けている。こうした姿勢は一九九九年に(財)さっぽろ青少年女性活動協会が管理運営業務を担当してからも引き継がれている。(後略)」「(札幌の児童文化センターとしての中島児童会館)」

この提起をお互いじっくりと考えたいものである。

鈴木 喜三夫

(すずき きみお)



一九三一年・札幌生まれ。札幌北高から東京・玉川学園大学へ入学。五六年中退してテレビ作家で活動後、札幌へ帰り五九年専門劇団「さっぽろ」創設。八六年フリー演出家、二〇〇九年「座・れら」を結成、現在に至る。九四年北海道文化奨励賞、〇七年北海道文化賞受賞。〇四年「北海道演劇1945-2000」(北海道新聞社)上梓。

ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本のご案内「本シェルジュ」 厳選本の紹介 荒井さん編 ①

荒井 宏明(あらい ひろあき)

一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事 札幌大谷大学社会学部、東海大学現代教養センター講師 北海道子ども読書推進委員



『ねないこはわたし』

著:せな けいこ 出版社:文藝春秋



これまでに300万部以上、発行されている『ねないこだれだ』など、数々の人気絵本を発表してきた、せなけいこさんのこれまでの人生を振り返った1冊です。せなさんは『ねないこだれだ』を長男(黒田龍之助さん)に聞かせる気持ちで書いたといいます。龍之助さんはNHKのロシア語講座などで知られる有名な言語学者です。そして、せなさんの夫は落語家・落語研究家の故・6代目柳亭燕路さんです。作家・落語家・言語学者と「ことば」に関して、さまざまな方向からアプローチしているユニークな家庭です。さらに、せなさんは貼り絵表現で、後々まで広く親しまれるスタイルを築いた絵師でもあります。せなさんの発想や創作意欲の原点がこの『ねないこはわたし』に記されています。

『なくなりそうな世界のことば』

著:吉岡 純 イラスト:西 淑 出版社:創元社



世界で話されていることばは約7000あるといわれています。そのなかには民族や社会集団の少数化によって、「話す人がいなくなりそうな言語」がたくさんあります。この本は50の少数言語の中から、それぞれひとつのことばを紹介しています。ウェールズ語の「ヒライス」は「もう帰れない場所に帰りたいと思う気持ち」を表すことばです。これまでどれだけのひとが、このことばをどんな場面で、どんな思いで使ってきたのでしょうか。そしてこの言葉が消えたとき、それらに込められてきた思いはどこに行くのでしょうか。スライアモン語(カナダ)やアルタ語(フィリピン)は、話せるひとがもう10人しかいません。最後のひとりになったとき、そのひとはだれに話しかけたいのでしょうか。はかなさと切なさを感じながらも、気持ちを優しくさせてくれる一冊です。

『うちの子は字が書けない (発達性読み書き障害の息子がいます)』

著:千葉リョウコ、宇野彰 出版社:ポプラ社



「どうしてこんな簡単な字が読めないの?」「なんでカタカナが書けないの?」これまで多くの子どもたちがその叱責に傷ついてきました。「怠けているからだ!」このことばで学びどころか、生き方すら放棄してしまった人もいます。発達性読み書き障がい(ディスレクシア)の出現頻度は、どの障がいよりも高い(子どもの8%弱)と言われているのに、とても認知度が低いのが現状です。国内で専門的な調査や研究が始まったのも最近で、特別支援の先生でも知らないひとが少なくありません。漫画家の千葉リョウコさんは、長男のフクくんが6年生のときにディスレクシアであることが判明したことからトレーニングを始めます。専門家の宇野彰先生の監修のもと、親子で一歩一歩進んでいく姿がコミックエッセイで紹介されています。

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

お問い合わせ お申し込み

MA・SO・BOに関する最新情報、MA・SO・BO通信のバックナンバーは、こぐま座のホームページからもご覧いただけます。▶
https://www.syaa.jp/sisetu/gekijou/kogumaza/index.html



「子どもたちの楽しそうにイキイキと演じる姿」は、平和であるからこそ守られているものです。世界で繰り広げられている悲しい光景に、子どもたち、そして人々の日常がなくなっていくことに、深い悲しみを感ずります。平和について、そして子どもたちが十分な機会を得て平穩に成長することがいかに大切であるかについて、私たちに提示しているように思えてなりません。(柳本)